

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：37102
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2013～2015
 課題番号：25870989
 研究課題名(和文) フランス現代哲学における主体・個体・人格概念の再検討(家族の解体・再構築を軸に)

 研究課題名(英文) Rethinking on the Concepts of Subjectivity, Individuality and Personality in 20th-century French Philosophy (centered on the dissolution/reconstruction of family)

 研究代表者
 藤田 尚志 (FUJITA, Hisashi)

 九州産業大学・国際文化学部・准教授

 研究者番号：80552207

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：フランス現代哲学の思想家たち、なかでもドゥルーズのテキスト分析を行った。これまで家族や結婚に対して否定的・破壊的な態度をとっていると思われてきた著者のテキストを丹念に読み直すことで、家族主義の否定であって、家族そのものの否定ではないことを改めて確認し、さらに、彼の主体観と欲望概念・性概念を結びつけることで、より深く包括的なドゥルーズ読解を提示することができた。「分人主義的結婚は可能か？ドゥルーズ＝ガタリの『アンチ・オイディプス』を読み直す」、「Humanitas」第7号(玉川大学人文科学研究センター、2016年3月)や岩野卓司編『共にあることの哲学』(書肆心水、2016年4月)が成果である。

研究成果の概要(英文)：We analyzed texts of French contemporary thinkers, especially Deleuze. Considered until now as negative or destructive for family or marriage, we re-read thoroughly his texts, to see that what matters for him is rather a criticism of familialism than that of family itself. Moreover, we tied his theory of subjectivity and his concept of desire and sexuality to propose a deeper, comprehensive vision of his philosophy.
 Concerning this project, we published five printed matters. 1)"Does Exist something like a dividualist marriage?" ("Humanitas" vol. 7, Research Center of Humanities, Tamagawa University, march 2016).
 2)Co-edition : "The Philosophy of Love, Sexuality and Family", 3 volumes (Nakanishiya, April 2016),
 5)Co-edition : "The Philosophy of Being together: Contemporary French Thought questioning the danger and hope of Community" (Shoshi-Shinsui, April 2016).

研究分野：近現代フランス思想

キーワード：人格性 主体性 個人性 家族 愛 性 結婚

1. 研究開始当初の背景

研究成果 科研PD(2006-09年):フランス近現代思想における身体論(科学・芸術・政治との関連から見たその展開) 学振・特別研究員(PD)に引き続き採択された折には、先の研究を継承・拡大して三年間の研究を行ない、共著を5冊、単独論文を9つ刊行した。ここで、(1)固有身体の所有性(身体は誰の「もの」か?生命倫理に典型的に見られる法的・政治的問題)、(2)知覚と直観の問題(運転手が自分の運転する車全体を一種の身体のように知覚し操作する有名な「自動車知覚」の例。そこから身体直観などの美学的な問題につながる)、(3)技術の問題(義肢など、無機的なものが有機的に身体に組み込まれる)という、身体を考えるうえでの科学的・美学的・政治的な三つの視点が確立された。

研究成果 若手スタートアップ(2009-2011年):フランス近現代思想における身体論(愛・性・家族から見たその展開) 検討の結果、豊かな思想的鉱脈であるフランス近現代思想の身体論にもおそらくは一つの「方向性」とも言うべきものが孕まれていることが明らかになってきた。それが、「(非)有機的(non-organique)」、すなわち身体外技術を絶えず取り込んでいく身体を根幹に据える身体論である。ただし、科学・芸術・政治の観点から身体を見ることは、問題を多角的に検討する上で貴重であったが、切り離された個別的な諸側面を再び統一的な観点から眺めるには限界があった。(非)有機的身体論をさらに精緻に検討するには他の多角的かつ統一的な視点が必要であった。この欠けていたものをもたらししてくれるように思われるのが、「愛・性・家族において制度づけるものとしての身体」という観点である。こうして二年間の研究を遂行し、論文6本を執筆、訳書を1冊刊行、国際シンポジウム等でのフランス語発表を4つ、学会等での日本語発表を4つ行なった。

研究成果 海外研究者との協働 上記成果との関連で特に強調しておきたいのは、フランス・イギリスの研究者2名、東京の研究者1名を招いての国際シンポジウム「結婚の脱構築」レヴィ=ストロース、ボーヴォワール、クロソフスキー、デリダ(2010年11月20日、九州日仏学館)を主催したことである。また、その後、2011年2月10日には、フランスのパリ・エコール・ノルマル・シュペリールで国際シンポジウム「アジアにおける現代フランス哲学」を主催した折、応募者自身「結婚の形而上学とその脱構築 契約・優先性・個人性」と題した発表を行ない、今現在もなお、研究の深化に努めている。

2. 研究の目的

本研究は、**フランス現代哲学における主体・個体・人格概念の再検討を、家族の解体・再構築**に関する思想家たちの事例分析に即して行なうことを目的とする。すなわち、20世紀のフランス実存主義・現象学からフランス構造主義・ポスト構造主義に至るまで、多様な思想潮流に属する思想家たちが独自の**身体概念**から出発して、とりわけ**愛・性・家族の提起する諸問題**をどう取り扱ってきたのかを、精密なテキスト読解とに基づいて検討することを旨とする。主体・個体・人格概念の徹底的な改変を試みたフランス現代哲学を、現代社会において動揺する家族に関する新たな理論の模索として読み直すことで、次世代の**生命哲学を展開していく可能性**を探りたい。

身体性の哲学から生の制度の探究へ、家族の事例を通じた主体・個体・人格概念の再検討へ

フーコー、ドゥルーズ、デリダをはじめとする現代フランス哲学の思想家たちは、「主体の解体」を唱え、「個体」ではなく「個体化」を称揚し、「人格」概念を批判したことで一般に知られている。その延長線上で「家族」概念に対しても批判的な分析がなされている。フーコーの生政治における統治の道具としての家族分析、ドゥルーズの『アンチ・オイディプス』に見られる家族批判、『弔鐘』に見られるデリダの「家族」の脱構築など、いずれも「私生児性」を称揚している。だが、逆に言えば、これらの記述は、今激しく変容しつつある現代の人間関係、とりわけ家族をどう理解すればよいのかを探る手がかりになるのではないか。

本研究は、中心的な分析対象として、現代フランス哲学の思想家たちの家族に関する記述を取り上げる。人類とともに誕生し、古代・中世と絶えず形を変えながら生き延び(イエのための結婚)、近代の所産であると同時に(ロマンティック・ラブ・イデオロギーの帰結としての「恋愛結婚」)、すぐれて生政治の現代的な問題でもある家族(事実婚やPACSなど新たな諸現象まで含めた、広義の意味での結婚)という制度は、深く検討されるべき一つないし複数の形而上学を背後に隠し持っている。ここでは、主体・個人・人格といった根本的な概念が、優先性や契約といった概念とともに徹底的に再検討されねばならない。現代フランス哲学を代表する思想家たちのテキストを丹念に読み解いていくことで、今もなお激しく変動しつつある「生の制度」について哲学的な考察を行なうための示唆を得ること。これが本研究の目的である。

3. 研究の方法

どのような方法論を用いるか

全体的な方向性としては、「フランス近現代思想の身体論を科学的・芸術的・政治的観点との関連において考察する」という特別研究員 PD での研究方針を基本的に継承しつつ、若手スタートアップで試みた（非）有機的身体論、すなわち、絶えず多数多様化していく社会的・技術的諸関係の束として固有身体を捉える観点から、自己と家族の関係を考えるというアプローチを引き続き発展・深化させていく。今回の若手 B では、プロジェクトの発展・深化として、20世紀フランスの思想家たちによる主体・個体・人格概念超克の試みを、家族の解体（とその先にある新たな家族の再構築）を論じる文脈との関連において、「身体を通して人間の生を制度づけるもの」の思考として分析する。

何をどこまで明らかにしようとするのか

フランス現象学の哲学者たち（サルトル、メルロ＝ポンティ、レヴィナス、ミシェル・アンリ、ジャン＝リュック・マリオン）構造主義・ポスト構造主義の思想家たち（レヴィ＝ストロース、ドゥルーズ、フーコー、デリダ、クロソウスキー）のテキストを取りあげ、そこに見られる主体・個体・人格概念の取り扱いを、とりわけ家族（愛・性）関係の分析に絞って分析していく。その際、彼らの試みを、主体の否定ではなく脱主体化の探究、個体の否定ではなく個体化概念の練り上げ、人格の否定ではなく新たな人格概念の創造と捉えることを試みる。その試みが成功したとき、彼らの家族「批判」もまた、異なる相貌を見せるはずである。高齢化・少子化・晩婚化・非婚化の進む先進諸国で「代理家族」など新たな家族モデルが模索される現在、旧来の家族概念の復権・復興ではない、新たな家族論の理論的可能性の探究が（新たな主体・個体・人格概念の創造とともに）急務である。現代フランス哲学の重要なテキストの精緻な読解・分析を通じて、そのようなありうべき「生の制度」の要請に対する応答を試みたい。

4. 研究成果

方法論的特色 まず、方法論的な特色として、思想分野に多く見られる外在的なテキスト読解に対して、思想史的なパースペクティブを見失うことなく、テキスト内在的な読解を試みる点が挙げられる。つまり、今回のプロジェクトにおいても、**テキストの読解**ということに徹底的にこだわった。

内容的な特色 次に、愛・性を含んだ人間関係の制度化（生の制度）である「家族」という観点から、フランス現代哲学の主体・個体・人

格概念の再検討を行なう点である。このような焦点化は、「**家族**」という**アクチュアルな問題に対して実践的な寄与を試みると同時に、主体・個体・人格概念の批判的再検討という形で理論的な寄与を試みる**ものである。グローバリゼーション下で、愛・性を含んだ人間関係・家族（結婚）関係もまた、加速的に多様性・流動性を高めつつ、しかし安定性をも求めている。フランス現代哲学を「生の制度」の再構築の模索として捉えることで、理論的・実践的な寄与が期待される。

具体的に言えば、**ドゥルーズのテキスト分析**を行った。これまで家族や結婚に対して否定的・破壊的な態度をとっていると思われてきた著者のテキストを丹念に読み直すことで、家族主義の否定であって、家族そのものの否定ではないことを改めて確認し、さらに、彼の主体観と欲望概念・性概念を結びつけることで、より深く包括的なドゥルーズ読解を提示することができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

藤田尚志「「役に立つ」とはどういうことか？ デリダ、プラグマティズムから考える大学教育論」、大学コンソーシアム京都編『第 21 回FDフォーラム報告集』、2016 年。

藤田尚志「分人主義的結婚は可能か？ ドゥルーズ＝ガタリの『アンチ・オイディプス』を読み直す」、玉川大学人文科学研究センター編『Humanitas』第 7 号、2016 年 3 月、129-143 頁。

藤田尚志「結婚の形而上学とその脱構築 契約・所有・人格概念の再検討」、北海道大学大学院文学研究科・応用倫理研究教育センター編『応用倫理 理論と実践の架橋』vol. 8 別冊『結婚という制度 その内と外 法学・社会学・哲学からのアプローチ』、2015 年 3 月、論文本編は 24-40 頁、討論での発言部分は 44-47、49-50、52、54 頁。

藤田尚志「ソフィストの力（アレテー） 大学における哲学教育に関する若干の考察」、『哲学論文集』第五十輯（九州大学哲学会創立 50 周年記念）、九州大学哲学会、2014 年 12 月、75-102 頁。

藤田尚志「大学の時間」、京都文教大学人間学研究所編『人間学研究』第 14 号、2014 年 3 月、70-77 頁（質疑応答などの採録は、83-85、87-88、90 頁）。

[学会発表](計 14 件)

Hisashi Fujita, « Deleuze, le nième sexe et le sujet larvaire », Erasmus Mundus Europhilosophie-Journée d'études « Genre et philosophie – le sujet universel à l'épreuve de la différence des sexes » à l'Université Hosei, le 6 juin 2016. (東京都千代田区)

藤田尚志「役に立つ」とはどういうことか？ デリダ、プラグマティズムから考える哲学的大学教育論、大学コンソーシアム京都第21回FDフォーラム第7分科会(2016年3月6日(日)、京都外国語大学、京都府京都市)

藤田尚志「分人主義的結婚は可能か？ ドゥルーズ＝ガタリの『アンチ・オイディプス』から考える」、玉川大学人文科学研究センター平成27年度第3回公開講演会(シンポジウム)(結婚を哲学する フランス現代哲学の観点から)(2015年11月14日(土)15:00-18:00、玉川大学教育棟505教室、東京都町田市)

Hisashi Fujita, « Passages de la popularité : nature, censure, traduction. Une lecture sur "Les popularités. Du droit à la philosophie du droit" de Derrida » dans le cadre d'un séminaire "L'Université comme architecture (ir)rationnelle de la philosophie" organisé par Yuji Nishiyama du Collège International de Philosophie (CIPh), le 23 mars 2015 (18h30-20h30) au Centre Parisien d'Études Critiques (Salle 1, 37 bis rue du Sentier, 75002 Paris, France)(フランス・パリ)

藤田尚志「結婚の形而上学とその脱構築 契約・所有・人格概念の再検討」、北海道大学大学院文学研究科応用倫理研究教育センター主催公開シンポジウム(結婚という制度 その内と外 法学・社会学・哲学からのアプローチ)(2015年1月11日(日)13:30-16:45、北海道大学 学術交流会館 小講堂)(北海道札幌市)

藤田尚志「僕らをつなぐもの 現代フランス哲学から考える愛/性/家族なき結婚の可能性」、ネットワーク日本哲学第4回(『なぜ、私たちは恋をして生きるのか』をめぐって)(2014年9月6日、京都大学文学部新館2階第三演習室)(京都市)

Hisashi Fujita, "Desire and Joy: Bergson and Deleuze on Political Philosophy", The 2nd International Deleuze Studies in Asia Conference 2014 Osaka/Japan. Panel Session "Metaphysics: Deleuze after Bergson / Deleuze (d')après Bergson" (2014年6月8日(日)、大阪大学豊中キャンパス・豊中総合学館402教室)(大阪府吹田市)

藤田尚志「天使と散歩 日本における哲学思想研究の外国語によるアウトプットの現状と課題についての個人的な印象」、Keynote Speech for "Laboratory of Thinking. The international conference at Osaka University" (2014年3月15日(土)11:00-18:00、大阪大学豊中キャンパス待兼山会館会議室)(大阪府吹田市)

藤田尚志「来たるべき結婚 フーリエを導入する」、ワークショップ「正しい結婚 西洋近代から考える愛・性・家族の極限」(2014年3月9日(日)10:00-18:00、福岡大学 A 棟 A811 教室)(福岡県福岡市)

藤田尚志「大学の時間」、2013年度人間学研究所(京都文教大学)公開シンポジウム「日本の大学、このごろ焦ってませんか? ~『社会に役立つ大学』の価値を問う~」(2014年2月11日(火・祝)14:00-16:30、キャンパスプラザ京都第4講義室)(京都市)

Hisashi Fujita, « Au milieu du chemin. La double frénésie et la politique », PBJ2013 "Remarques finales. Autour des Deux sources de la morale et de la religion de Bergson" (Les 5-8 novembre 2013, à la Maison du Japon dans la Cité internationale universitaire de Paris)(フランス・パリ)

藤田尚志「ソフィストの力(アレテー) 大学における哲学教育の問題」、九州大学哲学会シンポジウム(哲学教育の危機をこえて)(2013年9月29日(日)15:15-17:45、九州大学・箱崎キャンパス文学部4階会議室)(福岡県福岡市)

藤田尚志「結婚における 所有 と 誓いの脱構築 現代フランス哲学の視点から」、社会倫理研究所2013年度懇話会《恋愛と結婚のあいだ―「いき」の哲学、所有と誓いの脱構築》(2013年6月22日(土)午後14:00-17:30、

南山大学・名古屋キャンパス R 棟 3 階
R32 教室)(愛知県名古屋市)

81-112.

藤田尚志「ベルクソンとレヴィナスの隠喩論」、日本フランス語フランス文学会 2013 年度春季大会ワークショップ(来たるべき修辞学 文学と哲学のあいだで)(2013 年 6 月 2 日(日)午前 10:30-12:30、ICU・本館 252 教室)(東京都三鷹市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田 尚志 (FUJITA, Hisashi)
九州産業大学・国際文化学部・准教授
研究者番号: 80552207

[図書](計 7 件)

藤田尚志・宮野真生子編『愛』、シリーズ『愛・性・家族の哲学』、ナカニシヤ出版、2016 年 4 月。共著、担当部分:「おわりに」, 206-209 頁。

藤田尚志・宮野真生子編『性』、シリーズ『愛・性・家族の哲学』、ナカニシヤ出版、2016 年 4 月。共著、担当部分:「はじめに」, i-v 頁。

藤田尚志・宮野真生子編『家族』、シリーズ『愛・性・家族の哲学』、ナカニシヤ出版、2016 年 4 月。共著、担当部分:「はじめに」(i-vi 頁)と第 1 章(2-37 頁)。

藤田尚志「にぎわう孤独—ドゥルーズと共同体の問題」、岩野卓司編『共にあることの哲学—フランス現代思想が問う 共同体の危険と希望 1 [理論編]』、書肆心水、2016 年 4 月、247-284 頁。

Hisashi Fujita, « Désir et joie : deux philosophies politiques de la vie. Deleuze ou Bergson II », in Shin Abiko, Hisashi Fujita et Masato Goda (éds.), *Tout ouvert : L'évolution créatrice en tous sens*, Georg Olms Verlag, coll. "Europea Memoria", octobre 2015, pp. 225-247.

Hisashi Fujita, « Télépathie : la recherche psychique de Bergson et la métapsychologie de Freud », in Brigitte Sitbon (éd.), *Bergson et Freud*, Paris : PUF, avril 2014, pp.141-154.

Hisashi Fujita, « Déjà vu: Force of the False and Idleness of Memory (Bergson or Deleuze III) », Kenjiro Tamogami (ed.), *Fragments & Wholes. Thoughts on the dissolution of the human mind*, Editions L'improviste, septembre 2013, p.